

礼拝

令和3年6月21日
4号



元氣と礼儀

～今だからこそ、心配りができる人に～

早いもので、もう十日もすると一学期の期末考査が始まります。時間の使い方や勉強の質や量を工夫して、テスト対策を進めていきましよう。

さて、本日の礼拝は、本校の第六代校長 三枝樹正道(みぎきしょうどう)先生が書かれた文章を紹介し、公共の場における、自分の言動を省みるヒントになればと思います。

「元氣と礼儀」

若い人々が元氣に活動している姿は実に気持ちよい。生命の躍動そのものである。若鮎のようだが、ほんとうに喜ば

が自然に湧いてくる。生命の伸びゆく喜びとでもいうべきであろう。生命ある元氣に満ちた者には、いかなる障害も少しも苦にならず、ただひたむきな活動があるばかりである。極めて純真な無邪気な姿は若人の持つ特長の一つである。

先日も電車の中で、某女子大学の学生が四人、元氣にあふれた姿で乗っていた。明朗な楽しそうな声は何が面白いのか、笑いの連続である。もちろん箸の転んだのさえ可笑しい年頃とは言うものの、その姿その声その様子は、車内には自分たち以外に誰もいないかのような振る舞いである。車の走る騒音で、話の内容はわからなかつたが、その楽しそうな雰囲気は自ら周囲の人々にも楽しい気分を撒き散らしている反面、誰にも遠慮のない様子はまさしく自分たちだけしかないようであった。

その中の一人が紙くずを突然窓から車外へ投げた。それがまたあいにく次の窓から風によつて車内に戻され、次の座席に座っている乗客の膝の上へ落ちたのである。乗客は急に不愉快そうな顔をしてその紙屑を下に捨てて、前方の女学生をじつと見ていた。女学生のほうは、このことをわかつてはいたが、一言の挨拶もせずには相変わらず笑い続けている。無邪気といえばそうも言えそうであるが、もう大学生である。そこは何か割り切れない

いものを感じた。

最近、必要以上に遠慮をしたり、言うべきことも言わず、当然の権利も捨て、周囲や他人に気がねをすることが減ってきて、自分の意志を好き勝手に述べ思うがままに行動して、いらぬ憶測をする必要もなく、もやもやした不明朗さがなくなつた分気持ちは良くなつた。しかしその反面、周囲の人のことも忘れて、自分ひとりが勝手に思う存分の行動をして、少しも他人の迷惑を省みない人が多くなつた。元氣のあるのはよい。明朗なことよい、卒直な態度はよいが、人は社会共同の生活を営んでいるのであつて、自分の一挙手一投足といえども、必ず他人に対して何らかの関係があるというのを忘れてはならない。自分の一語一動も、善し悪しは別として周囲の人々に何らかの影響を与えているということに常に考えねばならない。人が集まると、この社会共同生活を営んでいるところに、お互に一定の秩序を守らねばならない義務がある。これが人間社会の礼儀である。この礼儀秩序を守つてこそ気持ちのよい社会生活が出来るのである。これを破ると混乱が起るのである。このことは別に難しいことではなく、他人も自分と同じ気分を持つている、同様の感覚を持つているということをやたら忘れなければよいのである。